

時間的対比による自己理解の初期発達

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
小野 陵太

「時間的対比による自己理解」は、これまで5歳頃からみられ始めるものであるとされてきた。しかし、近年、この時間的対比による自己理解の発達の前提となるものと考えられる「時間的拡張自己」の成立を4歳頃にみる研究がなされてきている。これにより、4歳頃においても時間的対比による自己理解がみられる可能性があると考えられる。そのため、4歳頃までを対象に含め、時間的対比による自己理解の初期発達を検討する必要があると考えられた。

以上のことから、本研究においては、田中・田中(1988)の自己形成視質問項目をインタビューで用いる質問項目として援用し、3歳半から6歳半の幼児における時間対比的な自己理解の初期発達を明らかにすることを目的とした。この質問項目は、過去・未来における自己と現在自己の差異点・同一点を問う質問などからなり、回答には自己の時間的対比が必要とされるものであった。結果の分析は、対象児を3歳後半群、4歳前半群、4歳後半群、5歳前半群、5歳後半群、6歳前半群の6群に分けて処理した。

その結果、時間的対比を必要とする質問項目に対して、3歳後半から、すでに高い生起率で何らかの回答がみられた。しかし、これらの反応には時間的対比が背景に想定されるとは言い難い回答も含まれた。これらのような反応を除き、過去や未来の自己と現在の自己との差異点や同一点を回答できたものは、概ね3歳後半から4歳前半にかけて増加がみられた。しかし、4歳後半で著しく減少し、その後5歳前半から再び増加を続けるという、発達のU字現象がみられた。この4歳前半の増加と5歳前半以降の増加が同じ質をもったものかということを確認するために回答内容の比較を行ったところ、4歳前半では、時間的対比の萌芽はみられるが、やりとりを続けるうちに他者との対比になるなど、不安定な回答であった。それに対して、5歳前半の回答では、安定した回答が得られることが明らかになった。

以上のような結果から、5歳頃において時間的対比による自己理解が安定的な能力として獲得されることが推察された。これまでの時間的対比による自己理解を問題にした研究では、5歳以降を時間的対比の時期としており、本研究の結果と一致する。さらに、本研究では、時間的拡張自己の成立する4歳頃に不安定ではあるが一定の時間的対比がみられ、4歳後半にはそれらが低下することが見出された。先行研究では4歳頃のこのような発達的变化については言及されておらず、本研究で新たに明らかになった知見であるといえる。

キーワード：時間的対比，自己理解，幼児期